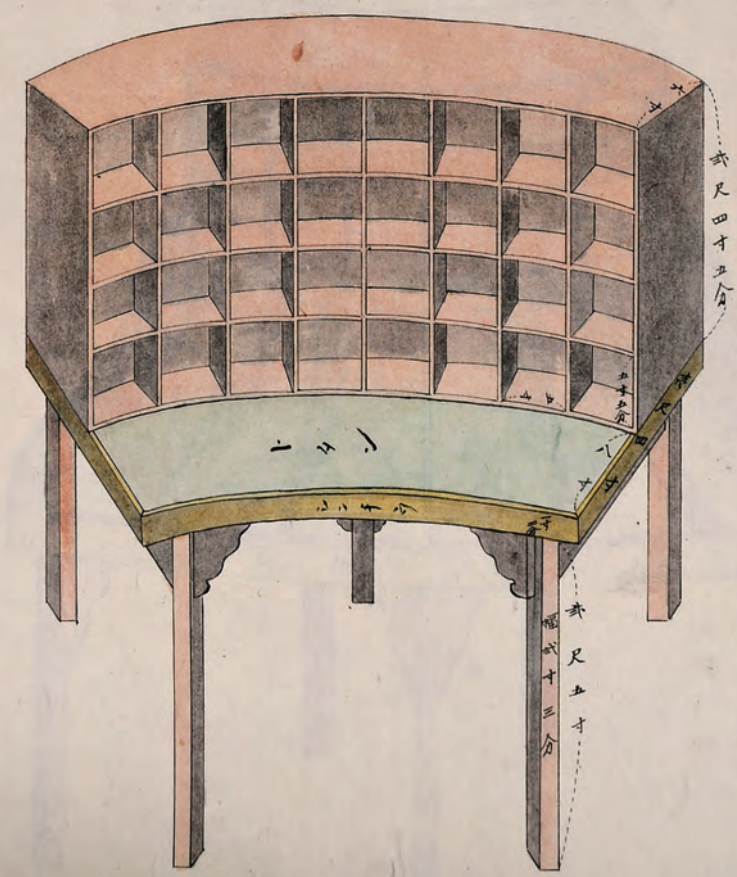


郵便配達区分明  
但至青月  
繪製善書及全概價六枚八円



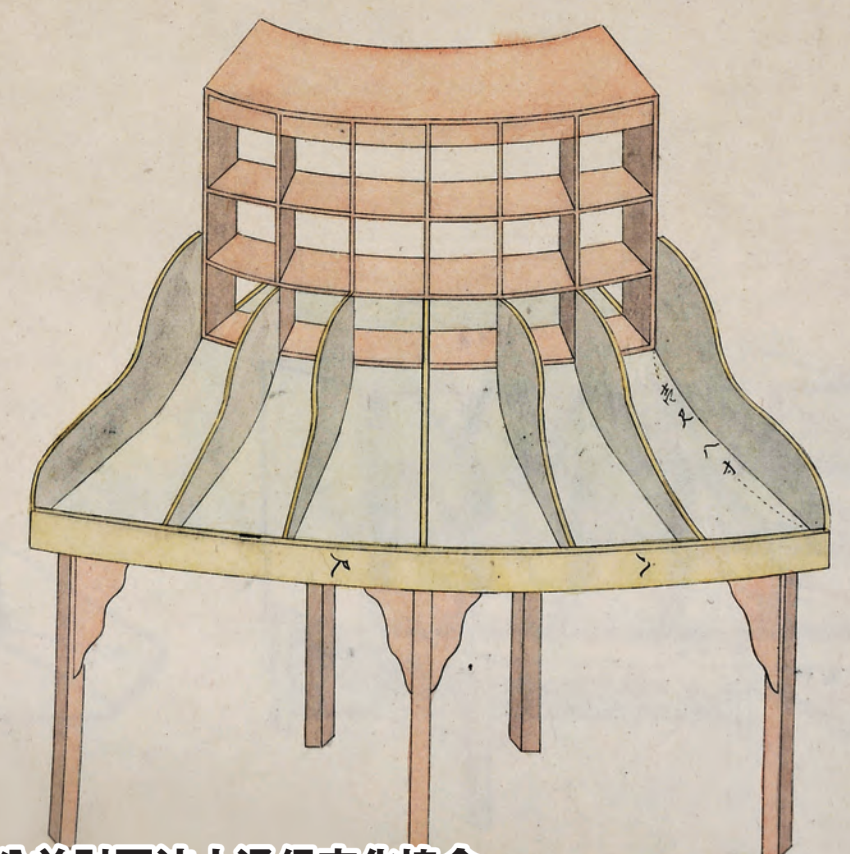
郵政博物館  
研究紀要

郵政歴史文化研究会編

# 郵政博物館 研究紀要

令和5年度 第15号 (2024年3月)

面 後



京都郵便電信局

公益財団法人通信文化協会

令和5年度 第15号 (2024年3月)

## 表紙解説

『郵便器具図』（郵政博物館収蔵）<sup>(1)</sup>

### 表紙上部 京都郵便電信局「郵便配達区分棚 但 葉書用」（「配達郵便区分棚之部」収録）

明治20（1887）年開設の京都郵便電信局（現・中京郵便局）で使用されていた葉書用の郵便配達区分棚。円弧状に設計され、前方に立った作業員から棚の各列が等距離に位置するよう工夫されている。このような構造は「配達郵便区分棚之部」においては津、富山、高知、宮崎にもみられるが、全体としてはめずらしい。図中には「檜製黄春慶塗概価二拾八円」「トタン」「シンチウ」（真鍮）といった材質や価格に関わる情報と、各部位の寸法が書き込まれている。『郵便器具図』に収められた図は白描画が多くを占めるが、本図は丹念に彩色が施され、陰影表現にも気が配られている。

### 表紙下部 京都郵便電信局「其二」（「配達郵便区分棚之部」収録）

「郵便配達区分棚 但 葉書用」の次頁に綴られた図で、寸法のほかは「其二」「後面」とのみ記入されている。前頁の棚を後側から描いたものと考えるのが自然だが、棚の段数や背面を塞ぐ板の有無などに相違もみられ、断定はできない。区分棚には引き出しを背面から抜き取る構造が多いが、本図では区分した郵便物が背面側の傾斜台に落ちる構造が示されているようである。傾斜台の仕切り板や脚部は曲線的にデザインされ、優美な印象を醸し出している。本図の制作年代は明らかでないが、明治35（1902）年に竣工したネオルネサンス様式の新局舎で使用された可能性がある。

（編集事務局 倉地）

---

1 全国各地の郵便局で使用されていた事業用品の絵図を集成したもので、郵便博物館が創立した明治35（1902）年頃、各局に提出させたものと伝わる。各図の制作年代は明治20～30年代と推定されているが、詳細は未詳（井上卓朗「郵便器具図（解説）」『日本郵便の曙』郵趣サービス社、平成15年、頁番号なし、『郵政博物館 研究紀要』第14号、令和5年、表紙解説）。